

二代目高橋竹山筆「初代の人間としての素晴らしさを引き継ぎたい」紀尾井だより(紀尾井ホール)
No. 71 2008年9月・10月号 P.6 を読む

幅広く世界を見ていた初代高橋竹山

——初代高橋竹山はどのような方でしたか？

とても幅広く世界を見ていました。ですから、私は「津軽三味線」の高橋竹山とは思っていません。先生は、音楽を聴くことも好きで、さまざまな分野の一流の演奏を聴いていました。中でもフラメンコギターのパコ・デ・ルシアが好きでした。ギターに比べると三味線には限界が多々ある、三味線はかなわないなどとも言っていました。自分の分をわきまえている人だったと言えます。若い頃は門付けをしていましたから苦勞の仕方が普通の人とは違います。だから「俺の三味線はこれだ」などと思い込んだらだめだと言っていました。門付けで時には追い払われながら演奏をしていましたから、人気が出てからも、お客はいつもいるものだとは思っていませんでした。私も演奏活動を続けていて、あるとき「自分のやりたいものを」やるのか、「お客が求めるもの」をやるのか悩んだことがありました。先生に相談したところ、何のためらいもなく「客が喜べば良いんだ」とあっさり言われて、納得した覚えがあります。

音色の素晴らしさが初代の三味線の真髄

——初代高橋竹山の三味線の真髄は何だったのでしょうか？

何と言っても、音色が素晴らしいことです。指使い一つとっても、流れがきれいで無駄がありません。決定的に違うのは「撥^{ばち}使い」でした。通常、津軽三味線ですと八の字の撥^{ばち}使いで音の強弱をつけるのですが、「それはだめだ。同じ場所で強弱をつけろ」と言ひまして、これだと糸も長持ちします。三味線の糸には結構お金がかかります。門付けで貧乏していた中で、生活のために生み出された技術でした。

——初代が独奏楽器としての地位を確立した津軽三味線はどのようなものでしょうか？

太棹で津軽のものを歌うから「津軽三味線」なのであって、「津軽三味線」という「三味線」があるわけではありません。元々、民謡は楽しくて歌っているわけではなく、労働歌でした。それを門付けや唄い手が昇華させて芸能にしていきました。唄い手が節を華やかに変化させていき、それが新節になりました。でも、基本が大切です。例え唄い手がいなくても、三味線で唄わせる音楽です。

——二代目として初代から引き継ぎ大切にしている事は何でしょうか？

初代は音楽家としてはもちろんですが、人間としての素晴らしさがありました。弱い人の立場で考えて、自分が三味線を弾いて聴いてもらえることのありがたさを知っていて、「生活していくこと」を大事にしていました。常日頃「人が集まるような家じゃなきゃ」とよく言っていて、いつも

たくさんの方が集まってきていました。肩書きで人を判断せず、男女の差別もしませんでした。ですから、女性が働くことと、男性が家長であることは何ら矛盾することではないと考えていました。私はこのような初代が人間として大切にしていたことを引き継いでいきたいと思っています。三味線はそれに付随してついてくるものでしょう。

<コメント>

渋谷にあった「ジャン・ジャン」というライブハウスで初代高橋竹山と高橋竹与(二代目高橋竹山)の演奏を聴いて以来、津軽三味線の素晴らしさを知るようになった。この文章は、その真髄を見事に言い表したもので、高く評価される。

(林 明夫)

－ 2008年8月31日記－